

貯法：室温保存  
有効期間：3年  
規制区分  
劇薬

外用合成副腎皮質ホルモン剤  
フルオシノニド製剤

トプシム<sup>®</sup>ローション0.05%  
TOPSYM<sup>®</sup> LOTION

承認番号	22000AMX00369
販売開始	1984年7月

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

- 2.1 細菌・真菌・スピロヘータ・ウイルス皮膚感染症及び動物性皮膚疾患（疥癬、けじらみ等）【感染症を悪化させるおそれがある。】  
2.2 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者  
2.3 鼓膜に穿孔のある湿疹性外耳道炎【穿孔部位の治癒の遅延及び感染のおそれがある。】  
2.4 潰瘍（ペーチェット病は除く）、第2度深在性以上の熱傷・凍傷【皮膚の再生が抑制され、治癒が遅延するおそれがある。】

3. 組成・性状

3.1 組成

有効成分 (1g中)	日局 フルオシノニド 0.5mg
添加剤	エチルパラベン、ステアリルアルコール、セタノール、ソルビタン脂肪酸エステル、プロピルパラベン、プロピレングリコール、ポリソルベート60、ポリソルベート80、リン酸水素ナトリウム、その他の添加剤としてpH調整剤（クエン酸）を含有する

3.2 製剤の性状

性状・剤形	乳化型の白色のローション剤
-------	---------------

4. 効能又は効果

- 湿疹・皮膚炎群（進行性指掌角皮症、女子顔面黒皮症、ビダール苔癬、放射線皮膚炎、日光皮膚炎を含む）  
○ 痒疹群（じん麻疹様苔癬、ストロフルス、固定じん麻疹を含む）  
○ 乾癬  
○ 掌蹠膿疱症  
○ 円形脱毛症（悪性を含む）  
○ 尋常性白斑

5. 効能又は効果に関連する注意

- 5.1 皮膚感染を伴う湿疹・皮膚炎には使用しないことを原則とするが、やむを得ず使用する必要がある場合には、あらかじめ適切な抗菌剤（全身適用）、抗真菌剤による治療を行うか、又はこれらとの併用を考慮すること。

6. 用法及び用量

1日1～3回、適量を患部に塗布する。

8. 重要な基本的注意

- 8.1 大量又は長期にわたる広範囲の使用により、副腎皮質ステロイド剤を全身的に投与した場合と同様な症状があらわされることがある。[9.5、9.7、9.8、11.1.2 参照]  
8.2 本剤の使用により症状の改善がみられない場合又は症状の悪化がみられる場合は使用を中止すること。  
8.3 症状改善後はできるだけ速やかに使用を中止すること。

9. 特定の背景を有する患者に関する注意

9.5 妊婦

妊娠又は妊娠している可能性のある女性に対しては、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。大量又は長期にわたる広範囲の使用を避けること。動物実験（ラット、マウス：連日皮下投与）で催奇形作用（外形異常）があらわれたとの報告がある。[8.1 参照]

9.7 小児等

長期・大量使用により発育障害を来すおそれがある。  
また、おむつは密封法（ODT）と同様の作用があるので注意すること。[8.1 参照]

9.8 高齢者

大量又は長期にわたる広範囲の使用に際しては特に注意すること。一般に副作用があらわれやすい。[8.1 参照]

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には使用を中止するなど適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副作用

11.1.1 眼圧亢進、緑内障（いずれも頻度不明）

眼瞼皮膚へ使用した際に起こることがある。

11.1.2 後嚢白内障、緑内障（いずれも頻度不明）

大量又は長期にわたる広範囲の使用によりあらわれることがある。[8.1 参照]

11.2 その他の副作用

皮膚の感染症 <sup>注1)</sup>	0.1～5%未満	頻度不明
皮膚の感染症 <sup>注1)</sup>		皮膚の真菌性（カンジダ症、白癬等）及び細菌性（伝染性膿瘍疹、毛囊炎等）感染症
その他の皮膚症状 <sup>注2)</sup>	魚鱗様皮膚変化、紫斑、多毛、色素脱失、刺激感、乾燥	ざ瘡疹、酒さ様皮膚炎・口周皮膚炎（口周、顔面全体に紅斑、丘疹、毛細血管拡張、痂皮、鱗屑を生じる）、ステロイド皮膚（皮膚萎縮、毛細血管拡張）
過敏症	紅斑、丘疹、腫脹	接触皮膚炎
下垂体・副腎皮質系機能		大量又は長期にわたる広範囲の使用による下垂体・副腎皮質系機能の抑制

注1) 適切な抗真菌剤、抗菌剤等を併用し、症状が速やかに改善しない場合には、使用を中止すること。

注2) 徐々にその使用を差しづかえ、副腎皮質ステロイドを含有しない薬剤に切り換えること。

注) 発現頻度は、製造販売後調査の結果を含む。

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

化粧下やひげそり後等に使用しないよう、患者に指導すること。

14.2 薬剤使用時の注意

14.2.1 眼科用として使用しないこと。

14.2.2 よく振って使用すること。

17. 臨床成績

17.1 有効性及び安全性に関する試験

17.1.1 臨床効果

湿疹・皮膚炎群、乾癬、円形脱毛症等121例を対象とした一般臨床試験で、有効率は71.1%（86/121例）であった<sup>1)</sup>。

18. 薬効薬理

18.1 作用機序

コレチコステロイドは、標的細胞の細胞質内に入り、そこに存在するレセプターと結合後、核内に移行して遺伝子を活性化し、合成されたメッセンジャーRNAが細胞質内に特異的蛋白リボコルチシンを合成する。

細胞膜を形成するリン脂質に含まれるアラキドン酸は、ホスホリパーゼA2（PLA2）により遊離後、代謝を受けて各種のプロスタグランジン、トロンボキサン、ロイコトリエンとなり炎症に関与するが、リボコルチシンはこのPLA2を阻害することにより、抗炎症作用を発現するものと考えられている<sup>2)</sup>。

18.2 薬理作用

抗炎症作用のスクリーニングテストとしての胸腺退縮試験（ラット）<sup>3)</sup>、抗肉芽試験（ラット）<sup>3)</sup>、抗ACTH試験（ラット）<sup>3)</sup>、in vitroにおける線維芽細胞抑制試験<sup>4)</sup>、ライソゾーム膜安定試験<sup>5)</sup>等のほか、クロトン油皮膚炎（ラット、ヒト）<sup>3)、6)、7)</sup>、灯油皮膚炎（ヒト）<sup>7)</sup>等の実験皮膚炎抑制試験、毛細血管収縮試験（ヒト）<sup>8)、9)</sup>及び病巣皮膚を用いた乾癬試験（ヒト）<sup>10)</sup>において、優れた生物活性を有することが認められている。

## 19. 有効成分に関する理化学的知見

一般名：フルオシノニド (Fluocinonide)

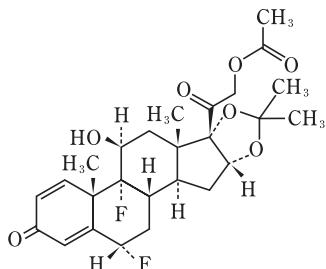
化学名：6 $\alpha$ ,9-Difluoro-11 $\beta$ ,21-dihydroxy-16 $\alpha$ ,17-(1-methylethylenedioxy)pregna-1,4-diene-3,20-dione  
21-acetate

分子式： $C_{26}H_{32}F_2O_7$

分子量：494.52

性状：白色の結晶又は結晶性の粉末である。クロロホルムにやや溶けにくく、アセトニトリル、メタノール、エタノール(95)又は酢酸エチルに溶けにくく、水にほとんど溶けない。結晶多形が認められる。

構造式：



## 22. 包装

100g [10g (ボトル) × 10]

## 23. 主要文献

- 1) 上田恵一, 他 : 皮膚. 1981 ; 23 (4) : 571-580
- 2) 鹿取 信 : 炎症とプロスタグラジン. 1986 ; 74-93
- 3) Rooks WH. : Syntex Research資料 (社内資料)
- 4) Ruhmann AG, et al. : Endocrinology. 1965 ; 76 : 916-927
- 5) 木下 啓, 他 : 西日本皮膚科. 1974 ; 36 (5) : 680-687
- 6) Ortega E, et al. : Acta Derm Venereol Suppl (Stockh) . 1972 ; 52 (67) : 95-97
- 7) Kaidbey KH, et al. : J Invest Dermatol. 1974 ; 63 (3) : 292-297
- 8) Stoughton RB. : Arch Dermatol. 1969 ; 99 (6) : 753-756
- 9) Place VA, et al. : Arch Dermatol. 1970 ; 101 (5) : 531-537
- 10) Dumas KJ, et al. : Acta Derm Venereol. 1972 ; 52 (1) : 43-48

## \*24. 文献請求先及び問い合わせ先

田辺ファーマ株式会社 くすり相談センター

〒541-8505 大阪市中央区道修町3-2-10

電話 0120-753-280

## 26. 製造販売業者等

### \*26.1 製造販売元

田辺ファーマ株式会社

大阪市中央区道修町3-2-10